

2025 年度総会開催—「菜宴」にて

奈良日仏協会の 2025 年度総会を、2 月 9 日（日）、「菜宴」（奈良市小西町）において開催しました。開会冒頭、出席者 13 名、委任状 49 名を合わせ 62 名で、現時点会員総数 93 名の過半数を越え、会則第 23 条の規定により総会が成立したことを確認。その後、三野会長を議長に議事が進められ、次のとおり議案が承認されました。1) 2024 年度活動報告、2) 2024 年度決算報告、3) 2024 年度会計監査報告、4) 2025 年度役員選出、5) 2025 年度活動計画、6) 2025 年度予算。

2024 年度活動報告では、協会創立 30 周年の記念祝賀会と記念誌発行が年度後半の活動の中心となり、フランス・アラカルトは 1 回のみ開催となったが、その他の文化活動は、シネ・クラブ 3 回、ガイドクラブ、美術クラブ、秋の教養講座各 1 回と予定どおり実施したことなどが報告されました。2024 年度決算は、前年度からの繰越金 1,554,387 円をベースに、今期の収入 565,702 円に対し、30 周年事業費を含む支出 771,475 円の結果、次年度繰越金額が 1,348,614 円となったことが報告され、三木監事より、証票がきちんと整理され正しく会計処理がされているとの監査報告がなされました。

2025 年度役員選出では、昨年体制の継続ということで、会長：三野博司、副会長：浅井直子、事務局長：杉谷健治、理事：藤村久美子、中辻純子、高松洋子（会計）、喜多幸子、菌田章恵、監事：三木正義、顧問：坂本成彦、の陣容で取り組むことが承認されました。

2025 年度の計画としては、これまでどおり日仏文化交流と会員相互の親睦という二つの大きな柱を軸に活動し、文化事業は、例年同様の回数を組み、フランコフォンの方々の活動への参加を促進するために交流費をさらに活用し、広報ではホームページのフランス語併記に注力していくと報告がありました。2025 年度予算は、活動計画に基づき、また郵送費など値上がりを勘案した案が提出され、了承されました。（決算、予算の詳細については、折込別紙をご参照ください）。

その後の懇親会では、新入会員 1 名、フランス人会員 1 名、神戸日仏協会関係者 3 名など、26 名が集いました。三野会長の開会挨拶の後、クロマチックハーモニカによるミニコンサートがあり、坂本前会長の乾杯の音頭を合図に、宴会の部がスタート。短い時間でしたが、参加者の皆さん全員にお話しいただくことができました。30 周年記念祝賀会のラシーヌ讃歌の準備が大変だったが身につくことも多かったこと、高齢化による会員数減が進むなか若い会員の入会の手だてを考えたい、など活発な発言の飛び交う場となりました。（事務局）

《 三野会長 2025 年度あいさつ 》

昨年のフランスでの話題と言えば、まずはオリンピックですが、年末にはノートルダム大聖堂の修復完成もありました。10 年ほど前、「Mon Nara」で、ヴィクトル・ユゴーの長編小説『ノートルダム・ド・パリ』をとりあげたとき、「書物は建築物を滅ぼすだろう」という司教補佐クロード＝フロロのことばを紹介しました。古代から建築は人間の思想を記録するためのいちばん重要で広く用いられた手段でしたが、グーテンベルクが活版印刷を発明して以降、ユゴーの時代にはその役割を書物に譲りつつあったのです。「そして 21 世紀の私たちは、デジタル革命がこんどは書物の命を脅かす時代に生きているわけであり、このフロロのことばに無関心でいるわけにはいかないでしょう」と、拙稿を結びました。

昨年 9 月、岩波新書から新著を刊行しましたが、紙の本と同時に、私としては初めての電子書籍もネット販売が開始されました。今後電子媒体が書物を滅ぼすことになるのかどうか気になるところです。とはいえ、デジタル時代を迎えても、奈良日仏協会としてはアナログの良さを生かしながら、活動を継続したいと思います。本年もよろしく願い致します。



《事務局からのお願い》 会員名簿を更新する時期になりました。記載事項に変更のある方は 3 月 31 日までに、下記のいずれかの方法で変更内容をお届けください。1) Mail : sugitani@kcn.jp 2) FAX : 0742-62-1741
3) 郵送 : 〒630-0224 生駒市萩の台 3-2-13 杉谷方 奈良日仏協会事務局 ※ お名前以外の掲載事項は自由に選択することができますので、掲載項目を変更したい方はその旨ご連絡お願いいたします。

総会後の懇親会

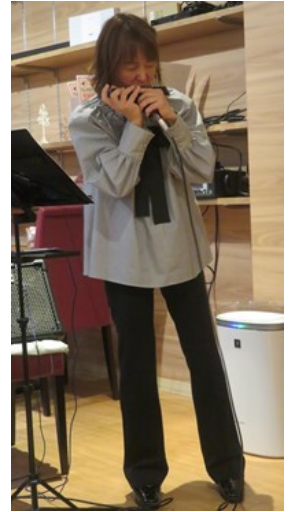
井上文さんによるクロマチックハーモニカの演奏

- ◆演奏曲：「オーシャンゼリゼ」「シェルブールの雨傘」「パリの空の下」
- ◆井上文さんからのメッセージ：

今回、総会後の懇親会にてクロマチックハーモニカの演奏をさせていただきました。



フランスの曲がレパートリーになかったもので、いつか吹いてみたいと思っていた3曲を選曲し、練習のたび、更に好きになっていくのを感じました。どことなく、日本の童謡唱歌に通じる感じもしました。皆さん演奏を温かく見守るように聴いてくださり、私の心も温かくなりました。そしてハーモニカの音色に興味をもってくださり、とても嬉しく思いました。懇親会で、美味しいお食事とワインをいただきながら、おひとりずつの興味深いお話を聞かせていただいたことがとても楽しく、奈良日仏協会さんの文化交流が素晴らしいと感じました。私もこの交流の場に参加させていただけたことに感謝します。本当にありがとうございました。



参加者感想

◆毎年12月に会員の辻みち代さんが南生駒で主催されているチャリティー・コンサートで、井上文さんの演奏を何度か聴かせていただきましたが、その度に余韻が残り、井上さんの奏でる音楽がこちらの体の中にも響いてくるような不思議な感覚がありました。天性のリズム感・歌ごころ・演奏技術の素晴らしさはもちろんですが、それらを超えたところに生まれてくる音楽の楽しさを今回も感じる事ができ、幸せな気持ちになりました。(浅井直子)

◆本日は日仏協会の懇親会に参加できて本当に楽しかったです。フランス語、日本語、そして少し英語で話すことができ、とても充実した時間を過ごしました。皆さんの温かいおもてなしに感謝しています。お料理もとても美味しく、ハーモニカのミニコンサートは、フランスのビストロのような雰囲気を作り出してくれて、完璧でした。とても楽しく、充実した経験となり、このイベントに参加できたことを嬉しく思っています。またお会いできることを楽しみにしています。本当にありがとうございました。(コリーヌ・アギーレ)



コリーヌさんと木内さん

◆懇親会の冒頭で新入会員として皆様に紹介していただき嬉しかったです。私は、リヨンに6年、コルマルに3年の滞在歴がありフランス愛は高い方かと思いますが、奈良日仏協会の皆様もフランス愛に満ちた方々ばかりでホックリ楽しい時間を過ごすことが出来て感謝しております。また、今後とも皆様との交流を深められたら幸甚です。何卒よろしく願い申し上げます。(木内成人)

◆本日は年次総会後の懇親会に参加させていただき、ありがとうございました。和気あいあいとした和やかな雰囲気の中で、フランス文学者、研究者、芸術家、フランスに長期滞在された方など多士済々の会員の方々のご挨拶を拝聴し、会員の皆様の日仏交流に対する熱意・エネルギーを感じとることができ、多くのことを学ばせていただきました。日仏交流の推進に共に手を携えて進んでいけたらと存じますのでよろしくお願い申し上げます。奈良日仏協会様の今後ますますのご発展を祈念申し上げます。(西口信吾 神戸日仏協会副会長)



西口さん夫妻

奈良日仏協会創立 30 周年記念行事を終えて

昨年11月24日(日)、奈良日仏協会創立30周年記念祝賀会を奈良ホテルにて開催しました(会員39名、一般13名、ゲスト3名参加)。山下真奈県知事およびジョラン・フェレリ十津川「空中の村」代表のご列席と祝辞、サンドリーヌ・ムシェ在京都仏総領事の祝辞、有志によるスピーチやパフォーマンスで盛り上がり、フレンチのコース料理に舌鼓を打ちながらの各テーブルの会話もはずみ、とても楽しい集いとなりました。また12月には、30周年記念誌を発行し、諸先人たちが積み重ねてくれた当協会の活動の歩みを小冊子にまとめることができました。

2024 年度 ガイドクラブ「靈山寺訪問」(10/27) 報告

◆◆参加者 12 名（会員 6 名、一般 4 名、ゲスト 2 名）。国宝の本堂にて東山管長の法話を拝聴し、般若心経を読経し、秘仏を拝観するなど、めったにない機会となりました。法話ではお寺の歴史や仏教の教えをわかりやすくかつユーモラスに説いてくださり、ありがたい気持ちになりました。「ピース」や様々な品種の秋バラを愛でながら庭園を散策し、喫茶室でバラにちなんだお茶やお菓子を賞味しました。管長のお母様の東山泰子さんのバラ園にまつわるお話では、慈愛にみちたやさしい表情とお言葉に一同すっかり魅了され、心に残る一日となりました。（浅井直子）

◆◆私の住まいは、靈山寺の西方、矢田丘陵の反対側にあり、靈山寺まで直線距離にして 5 km ほどですが、丘陵があるため遠回りして 8 km、車で約 20 分かかります。20 年以上も住んでいるのに、1 回しか行ったことがありませんでした。私のサイクリングのコースで、靈山寺の前はよく通りますが、今回久しぶりに訪れて、荘厳な仏像群、管長の面白い法話、薔薇園の静かな佇まいをたっぷり味わうことができました。小野妹子の息子の小野富人が壬申の乱で敗れて、この地に逃げて、薬草風呂で人々の病を治し、その後聖武天皇の娘孝謙皇女の病を治したことで、天皇から本堂（国宝）を寄進されたそうです。大仏開眼供養の導師を務めたインド僧菩提遷那がこの場所を気に入り、自らの墓所として定められたと言い、本堂にリアルなお姿の坐像がありました。般若心経の関西弁訳や「18 歳」と「81 歳」の違いをユーモラスに比較したお話などを伺い、楽しく過ごすことができました。（杉谷健治）

◆◆靈山寺の待ち合わせ場所で、奈良女子大学の留学生のマリーさんと彼女の友達で偶然日本を旅行中のメロディーさんと合流して散策を開始した。本堂（国宝）では、この時期にのみ公開される本尊の秘仏薬師如来と十一面観音立像（重文）などを拝観し、管長のお話を直に拝聴することができた。このお寺は行基さんと深い関係があると説明を受け、みんなで「般若波羅・・・」と般若心経を唱え、両手の組み方によって左左脳、右左脳など自分のタイプを確認したりしているうちに、時間がどんどん経ってしまった。管長のお母様の東山泰子さんから巻きが入り、近道を通ってバラ園へと急いだ。このバラ園は、管長のお祖父様がシベリア抑留から帰還して平和を願って作られ、北東の鬼門の位置にあたるので、棘のある植物、バラの原種はアジアのハマナス、お釈迦様の時代はバラの香りは 2 週間後には消えてしまい無常であると出家されたという逸話から、バラが選ばれたそうだ。（藪田章恵）

◆◆Merci encore pour cette très intéressante visite du temple de Tomio. Mon amie et moi, nous avons adoré cette expérience et nous vous sommes très reconnaissantes. Tout le monde était très gentil et a essayé de nous inclure, merci encore ! (Marie Baudon)

興味深い富雄のお寺に訪問できたことを感謝します。友人も私もこの体験がとても気に入りました。感謝しています。みなさんすごく親切で、私たちを仲間にしようとしてくれました、もう一度ありがとう！（マリー・ボドン）

奈良日仏協会の皆様を「秋バラと秘仏宝物展」にお迎えして

秋バラが色鮮やかに咲きそろう境内に芳香が漂う靈山寺に、奈良日仏協会の皆様とフランス人留学生マリーさんとお友達のメロディーさんをお迎えして、和やかな心嬉しいひと時を過ごしました。秘仏公開中だった国宝の本堂では、東山光秀管長が寺の由来を解説し、明治までは 20 年に一度しか開扉されなかったという本尊薬師三尊像をはじめ、ずらりと並んだ十一面観音、十二神将、四天王像、華鬘や絵巻物など数々の宝物を拝観していただきました。特に皆様の興味を惹いたのは、右大臣小野富人が壬申の乱の戦に敗れ、登美山に隠居して薬草の湯屋を建て世人に施したという史実と、その湯屋に祀られていた白鳳時代の遷仏（重文）の展示で、1300 年以上の時を経て遙かなるいにしへの風景や人々の生活ぶりが目に浮かぶようだとの感想をいただきました。数年前に三野会長がフランス語に訳して下さった解説書が大いに役立ち、有難かったです。世界平和の祈りを込めたバラ園では、ローズティーや薔薇のアイスクリームを味わいながら、19 世紀から現代に至るまで代々薔薇の作出を手掛けてきた名門メイアン家の事、第二次世界大戦の終結を記念し世界平和を願って名付けられた 20 世紀最高の歴史的名花「ピース」誕生の秘話等々、談笑に花が咲きました。（東山泰子）



La vie à Uda, au cœur de la préfecture de Nara 奈良県の中心、宇陀市での生活

コリーヌ・アギーレ

Vivre à Uda, dans la préfecture de Nara, est une expérience à la fois enrichissante et apaisante. Uda est une petite ville, nichée au pied des montagnes, qui offre un cadre de vie serein tout en étant à proximité de la vie urbaine d'Osaka et de Kyoto. Cela permet d'apprécier le meilleur des deux mondes : le calme de la campagne et l'accès facile à la culture et aux infrastructures des grandes villes.

L'une des choses qui m'a séduite en venant vivre ici est la beauté de la nature environnante. Les montagnes, les forêts et les rizières qui entourent Uda offrent une vue imprenable et une atmosphère de tranquillité. Chaque saison apporte son lot de couleurs et de paysages changeants, que ce soit lors de la floraison des cerisiers au printemps, des feux d'artifice d'été ou des magnifiques couleurs d'automne.

Vivre à Uda signifie aussi pouvoir profiter d'une vie communautaire chaleureuse et d'un réseau de voisins bienveillants. La ville est riche en traditions, avec de nombreuses festivals et événements locaux tout au long de l'année, qui permettent de mieux connaître la culture japonaise et de rencontrer de nombreuses personnes, tant locales qu'étrangères.

De plus, Nara est une région extrêmement bien située pour les amoureux de l'histoire et de la culture. À seulement une heure d'Osaka, les temples de Nara, classés au patrimoine mondial de l'UNESCO, sont à portée de main. La ville d'Uda elle-même regorge de sites historiques et de petites randonnées qui sont un vrai plaisir pour ceux qui aiment explorer la nature tout en découvrant des trésors culturels.

Dans l'ensemble, vivre dans cette préfecture, et plus particulièrement à Uda, est un choix de vie qui permet d'allier tranquillité, beauté naturelle et proximité des centres urbains. C'est un endroit idéal pour ceux qui recherchent un équilibre entre modernité et traditions, tout en vivant à l'écart du tumulte des grandes villes.

(Coline Aguirre)

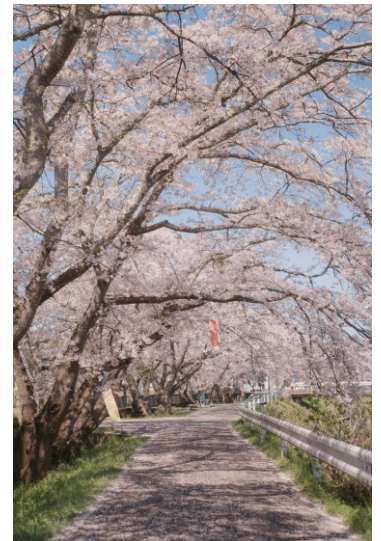
奈良県の宇陀市での生活は、充実感と静けさを感じさせるものです。宇陀市は山のふもとに位置する小さな町で、静かな生活と、大阪や京都の都市生活が近くにあるという両方の良さを享受できます。

ここに引っ越してきて魅力を感じたのは、周りの自然の美しさです。宇陀市を取り巻く山々、森林、そして稲作地帯の景観は見事で、季節ごとに変わる風景は心を癒してくれます。春の桜の花、夏の花火、秋の紅葉など、四季折々の変化を感じられる場所です。

また、宇陀市では温かいコミュニティと親切な隣人たちとの関係を楽しむことができます。地元の祭りやイベントが年間を通じて開催され、日本文化に触れながら多くの人々と出会うことができるのが魅力です。

さらに、奈良は歴史と文化が豊かな地域であり、観光名所や寺院が多く、特に世界遺産に登録されている奈良の寺院群はすぐ近くにあります。宇陀市自体にも歴史的な場所や素晴らしいハイキングコースがあり、自然を楽しみながら文化を学ぶことができる素晴らしい場所です。

総じて、奈良県で、特に宇陀市で生活することは、静けさ、美しい自然、そして都市へのアクセスのバランスが取れた生活を提供してくれます。現代と伝統を両立させた生活を求める人々にとっては、理想的な場所です。



在外研究がつかないだ不思議な縁

知念宏司 (ちねん こうじ)

これは研究上のつながりではなく、フランスで酒店を営む夫婦が我が家に泊まりに来たという、少し変わったお話である。

まず出会いから説明しよう。私が在外研究（専門は数学）のため、夫婦でストラスブールに到着したのは 2016 年 4 月 5 日。ストラスブール大学の宿舎（ゲストハウス）に滞在し、家を探す計画だった。宿舎の近くに酒店を発見したので、入ってみることにした。すると日本語で話しかけられてびっくり。その人こそ、昨秋来日し、我が家を訪れたファビアン・リブースト氏である。

氏に話を聞くと、日本好きで日本語を独学しており、すでに複数回日本旅行の経験があるとのこと。さらに店ではワインだけでなく日本酒も販売していた。出会った直後から大変親切にしてくれ、家探しを手伝ってくれたこともあった（最終的には手助けしてくれたのとは違う不動産屋を通じて住む場所を見つけたが）。引っ越して彼の店は多少遠くなったものの、店の前の通りには週末に大きなマルシェが出るので、買い物ついでによく立ち寄った。6 月には彼の自宅に招待され、食事をご馳走になった。ストラスブールから南へ 40km ほどの Wittisheim という小村にある彼の家は、何と奥さんと 2 人で 7 年かけて自分で建てたという。若い頃は料理人だったという彼の手料理、そしてワインの専門家だという奥さんデルフィーヌ選定のワインでもてなしてくれた。1 年間の滞在で 3 度招待され、そのうち 1 度は「牛フィレのウエリントン」の料理を教わった。こちらも 1 度アパートに招いて和食（広島風お好み焼き他）をご馳走した。

2017 年春の帰国後は、物を贈り合ったりする関係が続いたが、新型コロナもあり、会う機会がないまま 7 年が過ぎた。昨年になって、久々に日本に旅行する、という連絡が来た。ぜひうちに泊まるよう誘い、9 月 7 日と 8 日の 2 泊、我が家に滞在した。前日まで新幹線が豪雨で止まってハラハラしたが、運よく運転再開されたその日の来訪だった。有馬温泉のバス停まで車で迎えに行き、7 年ぶりの再会を果たした時は感慨深いものがあった（ただフランス語は少々不安だったが）。

初日は有馬温泉の街を少し案内した。夕食は鰻を中心に天ぷらを揚げて、まずはシャンパン（友情の証し）で乾杯、その後は日本酒の試飲会となった。「越後鶴亀」、「香住鶴」、「風の森」の 3 銘柄を準備した。ここでデルフィーヌの驚きのコメントが出た。「香住鶴」には塩のニュアンスを感じるというのだ。そう言われて飲んでみると確かにそんな気がしたのも不思議だった。ご存知の通り、「香住鶴」は山陰海岸の酒で、松葉ガニによく合わせられる。そんな説明も何もしないでこのコメントだ。彼らの店で日本酒を紹介しているのは主にデルフィーヌだそうだが、さすがが鋭い。他に興味深い話として「山羊のチーズに合う唯一の日本酒は濁り酒」というのもあった。なるほど、そうかも知れない。

翌日は灘の酒蔵見学。「白鶴」と「福寿」の資料館を訪れた。「福寿」では英語を話すスタッフから説明を受け、併設のレストランで昼食。鰻のカツが出たのだが、「昨日の天ぷらの方がおいしかった」と言ってくれたのはうれしかった。そして六甲山頂を案内して帰宅。

夕食は我が家で、取り寄せていた但馬牛ですき焼きをした。すでに日本通の 2 人だが、意外にもすき焼きは初めてだという。「鍋奉行」という言葉を教えたら、随分面白がっていた (directeur de Nabe とっておいた)。さすがに二晩フランス人と過ごす、こちらのフランス語もある程度復活したが、そうなるとお別れだ。翌朝、有馬温泉のバス乗り場で出発を見送った。車窓からデルフィーヌの涙が見えた。

フランス人は、信頼関係ができると日本人には真似ができないほど人情に篤いことがある。今回の交流でフランス滞在中の恩に報いることが多少できた気がしている。なお、彼らのお店はストラスブールのマルヌ通りに面した Le Cellier des Boulevards という。機会があれば立ち寄って頂ければ面白いと思う。



我が家での 1 日目の夕食



日本酒が並ぶ Le Cellier des Boulevards 店内



有馬温泉、天神泉源にて

シャンゼリゼ劇場で聴いたモーツァルトのピアノ協奏曲第9番「ジュノム」

角田 茂(つのだ しげる)

演奏会の記憶が長い年月を経ても、はっきりと甦ってくることは、そう多くあるものではない。私にとってそのような演奏会の中に、1984年2月14日、シャンゼリゼ劇場で行われた、ポルトガル出身の女性ピアニスト、マリア・ジョアン・ピリスの演奏会がある。この時、ピリスはモーツァルトのピアノ協奏曲を2曲、第12番と第9番を演奏したが、特に最後に演奏した第9番「ジュノム (Jeunehomme)」がすばらしかった。アンコールで演奏されたショパンの練習曲「革命」も、私の耳に今なお残っている。

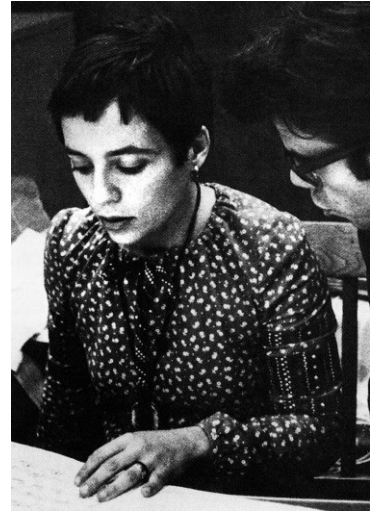
ピアノ協奏曲第9番変ホ長調 K271は「ジュノム」という愛称で親しまれている。この曲は1777年1月、ザルツブルクで作曲され、フランス人の女性ピアニストに贈られたと言われている。その女性ピアニストが誰であるか、色々議論はあるが、今私はそのようなことについて言及するつもりはない。モーツァルトはピアノ協奏曲を全部で27曲、作曲しているが、第20番ニ短調 K466より前に作曲されたもので、私が最もよく聴いているものが第9番「ジュノム」である。ピリスの演奏で最も印象深かったのは、ハ短調の第2楽章である。悲嘆に満ちたあのメロディーが、今まで体験したことのないようなドラマ性をもって、私に迫ってきたからである。

私はモーツァルトのピアノ協奏曲第9番とベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番のそれぞれ第2楽章を、「ぼやきの第2楽章」と呼んでいる。ベートーヴェンの「ハ短調のぼやき」の理由は難聴をはじめとする彼の生活苦がすぐ頭に浮かぶ。しかし、モーツァルトの「ハ短調のぼやき」の理由はすぐには理解できなかった。しかし、モーツァルトが、1777年9月、犬猿の仲であったザルツブルク大司教コロレードに辞表を書いていることを考えると、コロレードに対するぼやきかもしれない。

私の聴いたピリスの演奏会、実は、手首の故障で数年間演奏を中断していた彼女にとって、復活を記念する演奏会であった。私はこのことを、だいぶ後になってから知った。その時、初めてあの第2楽章の演奏を、宜なるかなと思った。そして、アンコールで演奏された力強い『革命』は、再出発への強い意志のように思えた。

宮廷生活に嫌気がさしたモーツァルトは、1777年9月、大司教コロレードに辞表を提出、母を連れてマンハイム・パリ旅行(1777年9月から1779年1月)に出る。この旅行の最終目的は、ヴェルサイユ宮殿での就職活動であった。私はピアノ協奏曲第9番「ジュノム」K271も、フルートとハープのための協奏曲 K299と同じように、パリでの就職活動関連のものであったと考えている。結果的にはこの旅行、幼い時にシェーンブルン宮殿で会ったことのあるマリー・アントワネットとの面会はかなわず、宮廷音楽家になることはできなかった。さらに母アンナ・マリアとの死別、ソプラノ歌手アロイジア・ヴェーバーとの失恋と、マンハイム・パリ旅行は悲惨な結果に終わった。この悲しみのどん底で作曲されたのがピアノソナタ第8番イ短調 K310である。私はこの曲、若くして病に倒れたディヌ・リパッティの、ブザンソン告別コンサートの演奏を好んで聴いている。

「人間万幸塞翁が馬」と言われるが、モーツァルトにとって、ヴェルサイユ宮殿での就職の失敗、良かった面もある。もし成功していたら、フランス革命に巻き込まれて大変なことになっていたかもしれない。モーツァルトはこの旅行後、ザルツブルクからウィーンへ転居している。この新天地において新たな気持ちで作曲されたのが、ピアノソナタ11番イ長調「トルコ行進曲付き」K331である。この曲を聴いていると、私は今でも何かほっとした気分になる。



マリア・ジョアン・ピリス「モーツァルト：ピアノ協奏曲第9、17番」(1972年録音、CDより)



フランス詩と遊びながら

森田俊吾（もりた しゅんご）

2023年に奈良女子大学に着任し、そろそろ2年。大学にいと、さまざまな業種の方とお話する機会も増え、「なぜフランス詩を研究されているのですか？」と、奇異の目、じゃなかった、関心の眼差しを向けてもらえることがあります。興味を持っていただけるのは嬉しいのですが、「おもしろいから」以外の答えが思い浮かばないまま今日に至っています。そこで今回は、自己紹介を兼ねて、なぜフランス詩を研究するに至ったのか、振り返ってみようと思います。

私の生まれは、愛知県豊橋市ですが、親の仕事の都合で幼少期に東京へ引っ越しました。両親は関西出身（明石と神戸）だったため、家では関西弁、外では標準語という「バイリンガル」な環境で育ちました。東京に引っ越して間もない頃、小学校の授業で作文を朗読した際、「ピアノ」を「ピ↑アノ↓」と関西風(?)に発音し、クラス中が爆笑の渦に包まれたことがありました（あのとき担任の先生がとっさに「森田くんは関西から来たんだもんね」とフォローしてくれたのが忘れられません）。

そんな「ピ↑アノ↓」体験から、言葉を交わすのが億劫になり、音楽の世界に逃げ込んでいきます。フランスとの繋がりも、入口はやっぱり音楽だった気がします。特に好きだったのがダフト・パンク。楽曲の格好良さもあるのですが、タイトルやジャケットにも、皮肉や遊び心が散りばめられていて、魅力的でした。たとえば「Veridis quo」という曲。一見ラテン語っぽいですが、そのまま読むと「ヴェリディスコ」（とってもディスコ）に聞こえます。これがわかると、アルバムタイトル『Discovery』の、もう一つの読み方が浮かび上がる仕組みです。最近ではストラスブール出身のアーティスト Jacques がお気に入りなのですが、最新アルバムのタイトルは『L'IMPORTANT C'EST D'ÊTRE EN VUE』（空白の重要性）。フランス人たちのこうした遊び心が私は大好きです。

音楽を通じて「ことば」の遊び心に魅了された私は、この真髓が文学、特に詩の領域にあることを知り、フランス詩の世界へ飛び込みます。

中でも好きなのがヴィクトル・ユゴー。「眠るボアズ」という作品で、ユゴーは「demandait」と韻を踏むため、架空の地名「Jérimadeth」（ジェリマデ）を創り出しました。造語を使えば何でもありでは？と思いきや、声に出して読むと、「J'ai rimé à dait」（私は dait と韻を踏んだ）と聞こえ、ここにもユゴーの遊び心が垣間見えます。

もう一つの例は、詩人アンリ・メシヨニックによるユゴーの読み方です。『懲罰詩集』の一節、「Dans l'affreux cimetière. / Frémit le nénuphar」（おぞましき墓地にて。震える睡蓮）では、[fr] の二重子音が繰り返され、最後に [f] と [r] が分離することで「ファ〜」っと花開く睡蓮の動きが生まれるのだとか。ユゴーがそこまで考えていたのか謎ですが、当時これを読んだとき「そんな読み方までできちゃうの」と衝撃でした。この

一節が今でも私の耳に残り続けているのは、音の美しさもさることながら、作者以上にこの読み手自身が「とっても遊んでいた」からなのではないかと考えています。「遊んでいる」人の言葉には、どこか体温があり、リズムがあり、普段遣いのそれとは違うものが感じられる。ある精神分析家の言葉をもじって言えば「詩とは、書き手と読み手、二つの遊びの領域が重なり合う場所で生まれる」のではないかと思います。

他にもおもしろい例はあるのですが、フランス詩特有のリズムや韻律の規則が絡むと、説明が長くなり紹介しきれないのでこの辺で終わりにします。いずれは、そうした細かなルールを知らずとも、色んな人がフランス語の「ことば」と気軽に遊べるようにしていくことを目標に、大学ではリズム論の研究を進めています。

遊んでばかりはいられない世の中ですが、「ことばの遊び」を通じて、私たちの物の見方がすこしでも変われば、世界のあり方もちよっぴり変わっていくのではないかと信じています。そんなフランス詩の「おもしろみ」を奈良から発信していきますので、皆さま、今後ともどうかよろしく願いいたします。



ル・カネにて（留学時代）

フランスと私

藤田亜紀 (ふじた あき)

宇陀市在住の藤田と申します。フランス人シェフと日本人の奥様がおいしいガレットを食べさせてくれることで有名な「メリメロ」(宇陀市室生下田口)さんが近くにいます。自己紹介を兼ねて、私とフランスについて書きたいと思います。よろしくお願いたします。



1995年初めてのシャルルドゴール空港で、機内の窓から野うさぎが素早く駆けるのをみた。パリの街角のカフェでは、「シガレット・プリーズ」と老婆が近寄ってきてタバコを懇願された。荘厳なノートルダム大聖堂は、時間がなく雰囲気だけをあじわった。

2001年、仏文科卒のサラリーマンと結婚した。ゴダールの映画、のちにバルチュスの絵画展に連れていってくれた。近所に住むソプラノ歌手のママ友が、プーランクの「愛の小径 Les chemins de l'Amour」を歌っていた。はかなく悲しげな曲調かとおもいきや、突き抜けたような華やかさも、心が満たされるのを感じた。

4年前のコロナ禍、高校生だった次女が16歳でフランスに渡り、メガネで有名なジュラ地方のロン＝ル＝ソーニエ (Lons-le-Saunier) という町に滞在した。途中でホストファミリーがかわり、ノルマンディのアルジャンタン (Argentan) に引っ越した。留学団体の方針で、1年分の大荷物を持ってひとりでTGVで移動した。心細かっただろうに…。

次女が帰国して、持ち帰った焼き菓子の箱や缶は模様がおしゃれでかわいくて、ずっと眺めていられる。今でも大切にしまっている。そしてフランスで仲良くなった方のお母さまに教えてもらったというケーキをときどき焼いてくれる。素朴な材料だが食べごたえのあるお菓子である。

一昨年の冬、娘の学校にブルターニュ地方から短期留学生が来日し、我が家に宿泊。ゲランド (Guérande) の塩の大袋をお土産に持ってきてくれ、我が家では半年以上フランス産の塩をいただいた。秋には知り合いからの依頼で、リヨン郊外のアノネー (Annonay) からの短期留学生が我が家に宿泊。日本人はラベンダーが好きなことをあらかじめ調べたらしく、ラベンダー入りのキャラメルやポップリをお土産にくれた。ポップリは枕元に置いて楽しんでいる。彼女は百均に行きたいと言うので同行したが、商品を見て「これは何するもの？」と興味深く聞いていた。娘が英語で説明していたが、説明の途中で別のものに目がいき「これは何？」と、どんどん目移りしていたのがおかしかった。かわいい鹿の角のカチューシャを購入したらしく、後日奈良公園でしれっと頭につけていたのも微笑ましい思い出である。ホームステイに来た彼女たちとはSNSでつながり、つい先日も新年の挨拶を交わしたばかり。昨春、次女が念願のフランス文学フランス語学科に入学。今秋、リヨン方面の大学に留学予定だ。

近年みた印象的な映画は『レ・ミゼラブル』。映画の中に入り込んで、心の中で民衆の歌を歌った。もしも前世があったなら、きっと私は革命下のあの時代を必死に生きていただろう。この先いつか私もフランスに渡り、3ヶ月ほどでよいから住人になってみたいと思う。早朝から焼きたてのバケットをかかえて歩く私の姿を想像している。奈良日仏協会の方々から届けられるネットにはない深く嬉しい情報を胸につめこんで。

(下の写真はすべて娘が2021年にフランスで撮影したものです)



ディジョンの街



ドールのメリーゴーランド



友達の馬、オーヴェルニュ＝ローヌ＝アルプ地方アリエ県にて

奈良での学生生活

マリー・ボドン

Lorsque j'ai posé mes valises à Nara, je ne savais pas à quoi m'attendre. Aujourd'hui, je peux dire que cette ville m'a offert bien plus que ce que j'imaginai.

Je m'appelle Marie, j'ai eu 20 ans le mois dernier, et j'étudie le japonais à l'université féminine de Nara. Cela fait maintenant quatre mois que je vis à Nara dans le cadre d'un échange universitaire, et cette expérience dépasse toutes mes attentes. Comme on peut s'y attendre, la vie à Nara est bien différente de celle à Paris. Ici, pas de métro bondé ni de passants pressés, mais des espaces verts à perte de vue et des biches qui se promènent jusque sur le campus.

Avant de venir étudier ici, j'avais de nombreuses angoisses et appréhensions. Pourtant, je n'aurais pas pu rêver mieux pour une première expérience d'échange universitaire. J'avais peur de ne pas m'intégrer, de ne pas comprendre la langue au quotidien. Mais j'ai rapidement été rassurée : les étudiantes sont bienveillantes et à l'écoute. Et vivre à Nara me permet de profiter d'un environnement paisible tout en restant proche d'Osaka et Kyoto, pour des escapades plus animées.

L'été dernier, en août 2024, je suis venue au Japon avec ma meilleure amie afin de voir le plus d'endroits possibles avant le début de notre troisième année universitaire en études de japonais. Nous avions prévu ce voyage avant même que je sache que je viendrais à Nara cette année mais ce fut le plus beau voyage de toute ma vie. Nous sommes restées trois semaines dans le pays du soleil levant et avons exploré Tokyo, Osaka, Kyoto, Kobe, Hiroshima, Miyajima et enfin Nara. Avec de bonnes chaussures et de grandes bouteilles d'eau, nous nous levions tôt et marchions jusqu'à 20km par jour mais chaque pas était récompensé par de magnifiques paysages ou de merveilleux temples.

Même si revenir sans mon amie était difficile au début, mon échange universitaire à Nara me fait grandir, et m'immerge pleinement dans une autre culture de l'intérieur. Surtout, il me permet de créer des souvenirs inoubliables. Je suis très reconnaissante pour cette opportunité et, si c'était à refaire, je n'hésiterais pas une seconde !

(Marie Baudon)

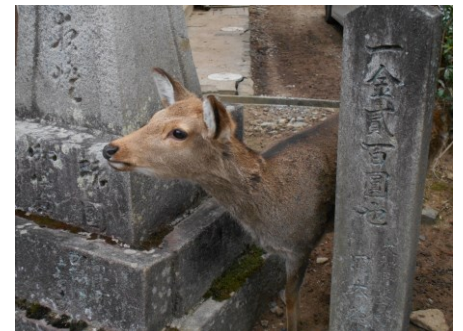
奈良に着いた時には、いったい何が待ち受けているのかわかりませんでした。こんにちでは、この街は想像していた以上のものを私にもたらしてくれた、とすることができます。

私の名前はマリーです。先月 20 歳になり、奈良女子大学で日本語を勉強しています。交換留学生として奈良に暮らして 4 ヶ月になりますが、その経験は予想をはるかに超えています。想像されるように、奈良での生活はパリとは異なります。ここには、混雑した地下鉄や押し合う通行人はなく、見渡す限りの緑地とキャンパスまで歩き回る鹿たちがいます。

ここに勉強に来る前は、たくさんの不安と心配がありました。しかし、初めての交換留学でこれほど素晴らしい経験ができるとは夢にも思いませんでした。なじめないのではないか、日常の言葉が理解できないのではないか、不安でしたが、すぐに安心しました。学生たちは思いやりがあり、私の言うことに耳を傾けてくれます。奈良での暮らしは、大阪や京都が近くにあって、より活気のある気晴らしをしながら、静かな環境を楽しめます。

昨夏 2024 年 8 月、大学 3 年の日本語学習が始まる前に、親友と一緒に日本に来て、できうるかぎりの場所を見ることができました。この旅行を計画したのは、奈良に来られることがわかる前でしたが、人生で最高の旅行になりました。私たちは日出ずる国に 3 週間滞在し、東京、大阪、京都、神戸、広島、宮島、そして最後に奈良を探索しました。良いシューズと大きなペットボトルの水をお供に、早起きして 1 日 20km も歩きましたが、一步ごとに素晴らしい景色や素敵な寺院に出会うことができました。

友達なしで帰国するのは大変だとしても、奈良での交換留学は私を成長させ、異文化に内側からどっぷり浸かり、なにより、忘れがたい思い出を作らせてくれます。私はこの機会にとっても感謝しています。そしてもう一度留学することになったとしても、一瞬も迷わないでしょう！



フランスの年末年始の過ごし方

中西さおり

奈良日仏協会の会員の皆さま、こんにちは。現在フランスに在住の中西さおりと申します。これまでも何度か Mon Nara にフランスに関する記事を書かせて頂いているのですが、この度、新たに奈良日仏協会へ入会することになりました。どうぞよろしくお願い致します。簡単に自己紹介をさせていただきますと、2007年に渡仏し、現在はパリから南へ約 60km 離れたフォンテーヌブローという街の近くに住んでいます。フランスの歴代王によって増改築されてきたフォンテーヌブロー城が近くにあり、周りは広大な森に囲まれている自然豊かな所です。皆さまも機会がございましたら、是非フォンテーヌブローまで足を運んでみて下さい！

さて、新年を迎え、2025 年がスタートしましたが、今回はフランスの年末年始についてご紹介したいと思います。冬時間の現在、1日の日照時間が短く、気持ちが減入りがちな時期ですが、唯一気持ちをわくわくさせてくれるのが街を彩るクリスマスのデコレーションやイルミネーションです。街中がクリスマスの飾り付けに覆われると、街の花屋さんの店先に Sapin de Noël (クリスマスツリー) がいい匂いを放ちながら並び始めます。ギャラリーラファイエットやプランタン、サマリテーヌなど大手デパートでは毎年テーマを決めてウインドーディスプレイがされるので、今年は何だろうと楽しみにしている人も多く、毎年子供から大人までたくさんの人で賑わいを見せています。また同じくシャンゼリゼ通りも鮮やかなイルミネーションが灯され人々の目を楽しませてくれます。

クリスマスには、フォワグラやスモークサーモン、Chapon (シャポンと言われる去勢した雄鶏) をオーブンでローストした料理をクリスマスのご馳走として食べたり、ツリーの下に並べられたプレゼントをみんなで交換したりと家族でゆっくり過ごすのが一般的です。日本でいうお正月のような過ごし方でしょうか。けれど、12月31日は家族というより、友達と一緒に年越しパーティーを楽しむ人が多く、パリではカウントダウンをしようとしてワインやシャンパンを片手にシャンゼリゼ通りやシャンドマルス公園に繰り出す若い人たちをよく見かけます。31日は地下鉄も終日運行、しかも無料とあって夜遅くまで新年を祝う人で賑わっています。代わって1月1日はほとんどのお店もお休みとなり、街はひっそりと静まり返っていますが、2日からは仕事も始まり通常通りの日々がスタートします。

クリスマスが終わると次は La galette des rois (ガレット・デ・ロワ) がパン屋さんの店頭並びます。王様のお菓子という名を持ち、パイ生地の中にアーモンドクリームが入っているお菓子です。そもそも公現節(1月6日)にロワ・マージュと呼ばれる東方三博士がイエス・キリストの誕生をお祝いするために贈り物を持ってやって来た日で、この日にガレット・デ・ロワを食べる習慣があります。ガレットの中にはアーモンドクリームのほか、フェーブと呼ばれる陶器の小さな人形が入っていて、紙でできた王冠も一緒に添えられています。家族の中で年齢の一番小さい子供が机の下に入り、切り分けたガレットを誰に食べてもらうか名前を呼び、お皿に取り分けていきます。そして取り分けられたガレットの中にフェーブが入っていた人は王冠をかぶり、みんなの祝福を受け、1年間幸せになると言われています。この時期になると一番美味しいガレット・デ・ロワを競うコンクールなども開かれ、どのガレットを食べようかとパン屋さんの前では足が釘付けになります。そして楽しみは何と言っても中に入っているフェーブではないでしょうか。我が家もフェーブ欲しさに毎年いろいろなガレットを食べ比べ、子供たちも箱いっぱい集めています！

フランスでの年末年始の過ごし方、もちろん地方や各家庭によって異なるかと思いますが、少しでも雰囲気をお届けできたら幸いです。そして皆様にとっても2025年が素晴らしい年になりますよう、また時々フランスからニュースをお届けしたいと思います。



ギャラリーラファイエットの
巨大クリスマスツリー



ガレット・デ・ロワと王冠



フェーブのコレクション
: 2025年、コンクールで優勝したガ
レットのフェーブもあります！

出会いと学び、新たな挑戦

山地 日和 (やまじひより)

奈良日仏協会の皆様、はじめまして。この度、新入会員となりました山地日和と申します。私は現在、中小企業向けの経営コンサルタントとして、人材活用のための制度作りや海外進出を含む新規事業の支援等を行っています。そのかわり、「株式会社 彩墨会」(<https://saibokukai.co.jp/>)という会社を奈良の書家と二人で立ち上げ、書道の裾野を広げる事業にも取り組んでいます。『書楽伝心』(=書のたのしみを現代から未来へ、奈良から世界へ、たくさんの方の心に伝えよう)ということばを旗印に、展示会や作品制作、パフォーマンスを行っています。近々では、知恩院で清水焼作家とともに二人展をしたり、奈良で初めてのウイスキー『鎧岳』のラベル揮毫などで、広くお目にかかる機会をいただけています。右に掲載されている QR コードから、ぜひインスタグラムや HP などをご覧くださいませと嬉しいです！



彩墨会の書家・中川彩河と私 (右)

私のフランスとの出会いは、高校時代読んだ「ベルサイユのばら」がきっかけでした。世界史に興味を持ち、大阪市立大学の仏文科に進学しましたが、当初はフランス語自体にあまり興味が持てず、不出来な学生でした。しかし、フランスの言葉と文化の中に生きている人々と出会いたいという思いから、休学して自費留学を決意しました。当時は、大学に交換留学などの支援制度はなく、自分で準備を進めました。インターネットもいまほど充実していませんでしたから、頼りにしたのは『地球の歩き方』別冊『成功する留学 フランス編』でした(今はもうないようです)。隅々まで読み込み、語学学校を選びました。それまでの不勉強のせいでとても苦労しつつ、半年間の学生ビザを取得するため自分で領事館に足を運び、ホームステイの手配は手紙を書いてお願いしました。また、大学の先生方には「君がフランスに行くのー？」とずいぶん驚かれましたが、毎日昼休みにラジオフランス語講座の音読練習に付き合ってくださいました。



2001年夏から2002年1月までトゥールーズとポワティエで学びました。同時多発テロやフランスフランからユーロへの移行といった歴史的な出来事も経験しました。特にトゥールーズで滞在したホストファミリー(右写真)には大変かわいがっていただき、今でも交流が続いています。フランスで出会った人々とコミュニケーションを取るために必死で勉強した日々は、私の人生においてかけがえのない時間でした。



帰国後は、大学で再び学びながらアリアンスフランセーズ大阪に通いました。そこでオリヴィエ・ジャメ先生や大賀正喜先生からフランス語と言語の面白さを学び、弁論大会や若者向けプログラムに参加して、たびたびフランスに“里帰り”していました(パリで奈良日仏協会の三野先生とぼったりお会いしたこともあります)。今回、奈良日仏協会に加入したきっかけは、子どもたちが成長し、自分の時間を持てるようになったことで、再びフランス語に触れる機会を持ちたいと思ったからです。ジャメ先生が日仏協会について話されていたことを思い出し、入会しました。

ジャメ先生には、12年前に小さな娘を連れて勉強できる環境がなかったころ、「どんな状況でも勉強したい人は勉強していいんだよ」と、自宅のフランス語教室に娘と共に招いていただきました。その後、下の子の妊娠・出産などで教室から遠ざかってしまいましたが、先生の言葉は学びにおいても仕事においても常に私を支えてくれています。お礼を伝えたいと思っていましたが不義理をしてしまいました。とてもさみしく感じています。

子どもたちが小さい頃は在宅で英語やフランス語を使った翻訳業務をしていましたが、外で働きたいと思い始めたころ、近所の「今西清兵衛商店(春鹿)」で利き酒案内のアルバイトを始めました(右写真)。日本語と英語で案内するのですが、私の英語にはフランス語アクセントがあるらしく、francophone(フランス語話者)のお客様にはすぐ見抜かれ、結局フランス語で話すこともしばしばありました。



気づけば、日本語・英語・フランス語で同時に3組のお客様と話していたこともあり、「意外となんとかなるものだな」とおもしろく思ったものです。半年ほどの勤務でしたが、この経験を通じて日本酒が大好きになり、その魅力を再発見する機会となりました。ワインも好きですが、日本酒をたのしむ方との交流もぜひ期待しています！

これからは、奈良日仏協会の活動を通じて、フランス語と文化への愛着をさらに深め、新しい挑戦を続けていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。最後に誌面をお借りして…

Monsieur Jamet, merci vraiment du fond du cœur. Je continuerai toujours à apprendre.

第9回美術クラブ例会「絹谷幸二 平和へ」展 鑑賞会のご案内

今回は、眼下に大阪湾の絶景を見渡せる梅田スカイビル 27階の天空美術館で、画家絹谷幸二氏の「平和」をテーマとした展覧会を鑑賞します。

- ✦ナビゲーター：南城守（絹谷幸二天空美術館 顧問）
- ✦日時：4月26日（土） 15:00～17:00
- ✦会場：絹谷幸二天空美術館 梅田スカイビル タワーウエスト 27階
- ✦時間・場所：15:00に集合（参加者には場所など詳細案内いたします）。
- ✦ナビゲーターによる事前解説の後、各自自由に鑑賞。その後、意見交換会を実施します。そのあとは、有志による懇談会を予定しております。
- ✦会費：会員 無料、一般 500円。 展覧会入場チケット（1300円）は各自購入のこと。

（意見交換会の会場が喫茶店になった場合、飲み物は各自負担）

✦定員：20名 ✦問合せと申込先: sugitani@kcn.jp tel:090-6322-0672（杉谷）

✦南城さんからのメッセージ：奈良市出身で文化勲章受章者の絹谷幸二氏は、若き日にヴェネツィア・美術アカデミアで人類最古の壁画アフレスコ（伊 英アフレスコ）を修得。その後、この古典技法を現代アートに甦らせ国際的に活躍する画家です。周知の如く盛期イタリア・ルネッサンス美術は、西洋美術の指針とされ、フランスにおいてその憧れは「イタリア詣」となり、17世紀のプッサンから19世紀のアングルまで、美術アカデミーで偉大なる修学法と考えられました。印象派のルノワールも、その後の近現代の画家たちまでもそれを実践しています。考えればあの「モナリザ」がルーヴル美術館にあるのも、フランソワ一世がレオナルド・ダ・ヴィンチをアンボワーズのクロ・リュセ城に招聘し、終の住処とさせた所以。フランス美術にとって、古代ギリシア・ローマ美学の「復活」を掲げたイタリア美術は、まさに美の規範「クラシック（古典・理想美）」そのものでした。つまりそこには時代と共に生まれ変わる「永遠の新しさ」があったのです。今回の鑑賞会は、フランス美術から視点を広げて、イタリアの古典絵画を学んだ絹谷藝術から、西洋美術の豊穡さを垣間見ようとするものです。何よりもテーマが「平和」。混迷する昨今の世界情勢に警鐘を鳴らし、人類救済のメッセージを発する「美術力」を併せて考える機会となれば…。 C'est pas mal ! n'est-ce pas ?



※画像は「日月天馬飛翔」

《2024年度第6回理事会報告》…事務局

日時：2025年1月16日（木）15:00～16:50。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、高松、菌田、杉谷、中辻、喜多、藤村、三木。議題 1. 会員数確認。議題 2. 11/14 理事会後の活動：創立 30 周年記念祝賀会(11/24)、記念誌発行(12/16)。議題 3. 今後の行事：(3/2) 第 65 回シネクラブ例会「アラン・ドロンの追悼『恋ひとすじに』」(4月下旬) 美術クラブ「絹谷幸二 天空美術館」鑑賞会。議題 4. 年次総会：(2/9)菜宴にて、(1/23)総会案内発送、式次第と概要、2024 年度活動報告・決算報告・会計監査報告・2025 年度役員改選・活動計画・予算・懇親会。議題 5. Mon Nara 通信 No.20、Mon Nara No.307 予定 2/20 発送予定。議題 6.その他：2024 年度決算打ち合わせ(1/11)、次回理事会 3月27日（木）15:00～16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆ 3月になると、道端や野原のあちこちで、明るい黄色の花びらとギザギザの葉をした「タンポポ（蒲公英）」を見かけるようになります。花が終わり白い球状の綿毛になると、子どもの頃は息を吹きかけて、羽のついた種子が空中にふわふわ飛び散っていく様子を眺めていたような気がします。☆英語名「ダンドリオン（dandelion）」は、フランス語の「ライオンの歯（dent de lion）」に由来し、ギザギザの形の葉を連想させます。いっぽうフランス語名「ピサンリ（pissenlit）」は、利尿作用があることから「おねしょする（pissier en lit）」に由来するそうです。☆日本では昔から多くの人に親しまれてきました。俳句では春の季語になっていますが、現代俳句を代表する坪内稔典さんの句「たんぽぽのぼぼのあたりが火事ですよ」がよく知られています。句切れがなく、ひらがなの「ぼぼ」のくり返し、独特のリズムやユーモアを生みだしています。「ぼぼのあたり」ってどこ？「火事ですよ」ってどういうこと？ など疑問がいっぱいわいてきますが、解釈は個々人の自由にまかされています。句自体が風の吹くままに飛んでいく綿毛のような自由さと、どんなところでも根づいてしまうたくましい種子の生命力を持ちあわせているようです。ただフランス語に訳すのは難しそうです。（N. Asai）

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2025年6月号は**5月31日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」（2月、6月、10月発行）又は「**Mon Nara 通信**」（4月、8月、12月発行）に**チラシ同封を希望される方は**、1）内容がフランスに関わるもの、2）本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2025年2月号 numéro 307

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : http://www.afjn.jp E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司